青の祓魔師～転生者というイレギュラー～(改訂中)

エクスタシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青の祓魔師～転生者というイレギュラー～（改訂中）

【Ｎコード】
Ｎ５１５４Ｘ

【作者名】
エクスタシー

【あらすじ】
神に見いられている五十嵐隆二は死んだ後で神が転生させてくれた。

プロローグ（前書き）

なかなか青エクの転生チートものが見つからないので自分で書いちゃいました。
続くかどうかわかりませんがお願いします。

プロローグ

隆二　ｓｉｄｅ

俺の名前は五十嵐隆二（いがらしりゅうじ）。先程ＴＳＵ○ＡＹＡで新刊（ワン○ース）の最新刊を買おうとしてたのに気づいた時には白い空間が広がっていたのだ。

隆「ここは、何処だ？」

すると後ろから声をかけられた。

？「お主は死んだんじゃ」

隆「誰ｄ「神じゃ」…なんだゼウスか。驚かせるな」

神「いや、其処は驚くところじゃろ…」

隆「あいにく普通じゃなくてね」

そう。俺は普通じゃないんだ。小さい頃から神々がみえている。そのおかげで人間の（・・・）友達はだれもいないが…。

ゼ「で、本題に入るんじゃがお主は死んだんじゃ。しかし、お主は神に見いられておる。で、転生させることにしたんじゃ。まあ、強制ではないがの」

隆「内容によるな」

ゼ「いや、じゃがの、転生内容は誰も決められなくてお主に一任する事にしたんじゃよ」

隆「マジで？」

ゼ「うむ」

隆「じゃあ早速だけど青エクの世界がいいな。家族は奥村兄弟の次男で」

ゼ「と、言うことは双子じゃなくて三つ子の真ん中と言うことかの？」

隆「ああ。雪男と同じようにサタンの力は隣に全部持っていかれて生まれる前に魔障を受けたってことにしておいてくれ」

ゼ「能力はどうするのかの？」

隆「うん。えっと…そうだな、まず武器はDグレの神の道化（クラウン・クラウヤヴッジ）と断罪者（メント）と六幻を合わせたのがいいな。思うだけで六幻とか神の道化に換わるやつ。当然ながらAKUMAじゃなくて悪魔を倒せるようにしてね。それから完全記憶能力と瞬間記憶能力が有れば充分だと思う」

ゼ「そうか。何か要望が有れば念話と頭に思い浮かべれば良いからの。次に容姿なんじゃが…」

隆「それはそっちで適当に決めといて」

ゼ「わかったぞい。じゃああのとびらを出れば多分協会のベッドの上じゃからの」

隆「うん。ありがとな。じゃ！」

そう言って隆二はとびらを開けた。

……多分？

プロローグ（後書き）

感想、指摘等はどしどし送って下さい。

第一話（前書き）

小説部分から始めることにしました。

第一話

隆二　ｓｉｄｅ

気がつくと見慣れない天井が視界に入った。転生は成功したらしい。
すると誰かが入って来た。

？「おい隆二！いつまでも寝てんじゃない！朝だぞー！」

獅朗さんだった。

隆「あ、えーと…」

獅「あっ。起きたか？。ほら、早くしないとメシがなくなっちゃうぞ」

そう言って部屋を出ていった。

隆「そういえば容姿はゼウスさんが決めてくれたんだよな。」

そう思いながら鏡の前に立ってみる。

隆「なん…だと！？」

そこには神田ユウがいた。

隆「…兎に角朝食食いにいこう」

そんなことを思いながら下へ降りていった。

朝食を食べている最中にゼウスさんから詳しい話を聞いている（念話で）。

ゼウスさんが言うには、俺は雪男と一緒に祓魔師（エクソシスト）になったらしい。因みに今は中学二年生の夏。原作開始まで一年半ある。容姿はゼウスさんの好みだそうだ。

隆《そういえば転生の直前に多分とか言っていたけどあれってなんだったの？》

ゼ《いや、実は転生者なんて居なかったから念のために逃げ口を作っておいたんじゃ。まあ成功じゃったから良かったがの》

隆《ふーん。今思い出したけど頼んどいた武器ありがとな》

ゼ《別にいいんじゃよ。いうならば六幻と断罪者に悪魔しか傷つかないようにしといたぞ。それと断罪者の弾の予備はお主の鞄とコートの内側に沢山あるからの。種類は九ミリパラベラム弾じゃ。祓魔屋ではお主の為の特注品じゃぞ。閃光弾とか聖水弾も入っているからの》

隆《そうか。なんか悪いな。そうだ、出来れば俺をメフィストが燐の監視の為に送り込んだ祓魔師ってことで燐と同じクラスに入れてほしいんだけど》

ゼ《わかったぞい。そうなるようにしとくぞ。それとお主はテストの日しか学校に来ないのにいつも満点を取る謎の天才児ってことにしといたぞ。じゃあな》

隆《ありがと、そんじゃーな》

そう言うと念話を切った。因みに飯はもう食い終わった。燐も食い終わったのか食器を片付けている。

しばらくすると雪男が

雪男「ご馳走さま。じゃあ行こうか」

といって俺らと学校に行く。

雪「じゃあ、いってきます」

獅「おう、頑張れよ」

といって元気良く送り出していた。

ところ変わって俺は喫茶店に入って聖書を丸暗記していた。三時間ずっとここにいるがやることがない。暇だ。何かあれば良いのだが。そんな思いに耽っていると不意に携帯電話が鳴った。祓魔師の応援要請だろう。ラッキーだ。場所は俺の今いる喫茶店から南に一キロ程行ったところだ。直ぐに向かう。前世で俺は要人の護衛や傭兵等をしていたので剣術と射撃には自信がある。

十分後。『正十字騎士團　ＫＥＥＰ　ＯＵＴ』と書かれた黄色い帯が張り巡らされている現場についた。

祓魔師「一般の方は危険ですので下がってください！」

と言われたので

隆「中二級の奥村隆二です」

といったら祓魔師は驚いた顔をしながら

祓「ご苦労様です」

と敬礼してきた。現場を見渡すと雪男がいた。

隆「よう、雪男。待たせたな」

雪「隆二兄さん！どこに行っていたんだい！？いつものことだけどちゃんと学校に来てよ！」

雪男…うるさいな…。

隆「あ～はいはい。わかりました～」

雪「全く…。取り敢えず状況を説明するよ。悪魔に寄生された男は

子どもを人質にしてこの廃ビルに立て籠っているんだ。他の祓魔師はまだこれないから隊長の茂木さんと一緒に突入するところで隆二兄さんがきたんだよ。事態の収集が早ければ早いほど、人質や寄生体の危険が少ないからね。」

隆「そうか。なら俺も着いていくぞ」

そう言って六幻体型の得物をバットケースからだす。雪男も背中のホルスターから二丁の拳銃をぬき両手で構えた。

雪「人命救助が第一です。現場に向かいましょう」

隆「あつ～。確かに悪魔が好みそうだな」

こういうビル内での戦闘のときは神の道化はでか過ぎるんだよな。断罪者が一番良いんだけど雪男がいるからな。

茂木「奥村君？一階の部屋を探らなくて良いのかい？」

雪「ええ。恐らく、彼は屋上にいると思います」

隆「俺も雪男と同意見です。こんな離れ小島みたいなビルに立て籠っている悪魔は頭が良くない。そういう奴は大抵上へ上へと逃げていくんですよ」

そう言いながら俺たちは階段を登る。俺と雪男はともかく、茂木さ

んは肩で息をしていた。

雪「僕と隆二兄さんで悪魔の動きを抑えるので、詠唱で祓ってください」

茂「わかった」

そういった直後俺は屋上に続くドアを蹴り破る。案の定其処には悪魔の姿があった。周りに魍魎（コールタール）がいる。悪魔に寄生された男は人質の少年を右手で拘束しながら視線をこっちに向ける。…悪魔って意外とキモいんだな。ま、どうでもいいけど

悪魔「クソ祓魔師のお出まし――と思いきや、こいつと変わらねえガキどもじゃねえか。ギャハハハハ……祓魔師はとんだ人手不足だな」

耳障りな濁声で下卑た笑いをもらす。

雪「アキラ君だね？僕の言うことを良く聞いて慎重に行動して欲しい――良いね？大丈夫。君なら出来るよ」

悪「テンメェ、シカトしてんじゃねぇぞコラァ！何が『慎重に行動して』だ？テメェが俺様を撃ったらこのガキも道連れだぜ？ガキごと撃ち殺すか？ソリャいいぜ。そもそも足がブルってんじゃねえか。コツコツコツコツうるせえんだよ」

隆「全く…。お前の相手はこの俺だよ！六幻！抜刀！」

そう言いながら六幻の刃に添って指で撫でる。すると指で撫でたところから刀身が白くなっていく。

隆「まあ、今回は足止めするだけだからな」

そう言って相手の左腕を切る。

悪「ぐあぁぁあ！」

悪魔が痛みで力を緩めた隙に少年はその場に屈み込む。

悪「！畜生！このガキが！！」

隆「雪男！」

雪男はその一瞬の隙に悪魔の右肩と左膝に聖なる銀で出来た対・悪魔用の銃弾を撃ち込んだ。

雪「茂木さん！」

茂「【……汝に問う　その黄金の秤は水平に保たれているか】」

悪「ク……ソ祓魔師ども……が……」

茂「【怠惰に傾いてはいないか　憤怒、色欲、強欲、嫉妬、暴食、傲慢のいずれかに傾いてはいないか】」

悪魔は何度も暴れたが聖銀の銃弾を撃ち込まれていては自力で寄生体から離れることも出来ない。

茂「【勤勉を、貞節を、救恤を、忍耐を、慈愛を、節制を、謙譲をもってその美徳とし　信仰の光にて　汝の闇を討ち祓わん】」

詠唱を終えた茂木さんが宙に聖なる十字を切る。悪魔は絶叫しながら消え去り男はその場に崩れ落ちる。もちろん左腕は繋がっているが。

茂「見事だったよ、雪男君、隆二君。祓魔師になって一年そこそこの――ましてや中学生とは到底信じられない」

事件が終わった後で茂木さんが労いの言葉をかけてきた。

隆「（雪男はともかく俺は二十代越えているけどな）」

今は遅れてきた祓魔師とともに現場の浄化を行っている。俺は雪男と茂木さんの会話に加わらないで作業をしているが。

隆「（しかし、今思えば初めてにしては結構いいコンビネーションだったな）」

そんなことを思いながら俺は作業を続けた。

あのあと事後処理やら騎士團への報告やらで時間を食ってしまい南十字男子修道院の前に着いたのは、夜9時を回っていた。まあ、事

情を知らない燐はバカだから大丈夫だと思うけど。物音をあまり立てないように自室へ向かう。中に入ると燐が読んでいた雑誌から目を離して顔を上げた。

燐「おう。遅かったな雪男、隆二」

隆「ただいま兄さん」

雪「――ただいま」

雪男は何かに怯えているような感じがしたけど多分燐にバレないか心配なんだろう。あ、鞄から鈍い音が。

燐「お前らなぁ。そのうち鞄切れるぞ。そんなもん詰め込んで」

は？今なんつったんだ？まさか燐に限ってそんなこと――

燐「どうせクソ難しい参考書でいっぱいなんだろ？俺の鞄と取っ替えてやろうか？俺のはまともに教科書入れたこと無いから丈夫だぞ」

……まあそんなことだろうとは思ったけどさ。あんまり変な発言しないで欲しいわ。そんなことを思っているとふと大きな皿に目が止まる。

雪「……これ兄さんが作ったの？」

燐「おー、うやまってへつらえよ」

隆「その言い方、神父さんみたいだな」

燐「だっ、誰が、あんなクソジジイに……似てるわけねぇだろ！」

雪「ジジイじゃなくて神父さんでしょ。昔はちゃんと『父さん』って呼んでいたのに――それと何でこれ三つもあるの？」

燐「それはなルシアン・ローレットおにぎりなのだよ。明智くん」

隆「それを言うならロシアン・ルーレット。それと明智くんじゃなくてワトソン君じゃないのか？」

燐「まあ…そうとも言うね」

雪「それでこの中の具は何？」

燐「えーと、タバスコとチョコレート、イチゴ大福が雪男ので、胡椒と蜂蜜、こし餡が隆二のだ」

雪「それって一個も当たりがないんじゃ」

隆「もはやイジメだな」

すると雪男は話題を変えた。

雪「明日のチャリティー・コンサートどうなった？」

燐「ああ、あれな。やっぱり俺らが手伝うみてーだぞ。全く、せっかくの土曜日なのにめんどくせぇ」

雪「――まあまあ。真面目に働いたら晩御飯は肉にするって丸田さんがいっていたよ」

燐「マジでか。肉ー！雪男、隆二、お前らも頑張れよ。サボったら容赦しねえぞ。じゃあ、おやすみ！」

隆「（現金な奴だな）おやすみ」

そう思いながら眠りの世界に入っていく。

第一話（後書き）

感想、指摘等はどしどし送ってください

主人公設定（前書き）

主人公設定です。
ネタバレ有り

主人公設定

名前…奥村　隆二

一人称…俺

能力…完全記憶能力、瞬間記憶能力

武器…Ｄ－ＧＬＡＹＭＡＮの神の道化（クラウン・クラウンジメント）と断罪者と六幻を合わせたようなもの。思うだけで六幻とか神の道化に換わる。雰囲気はＧＯＤＥＡＴＥＲの新型神機みたいな感じ。六幻と神の道化は剣の太さが変化する。効果は剣、銃共に退魔の剣と同じ。

設定…燐の弟で雪男の兄。雪男と同じようにサタンの力は隣に全部持っていかれて生まれる前に魔障を受けた。悪魔と祓魔師の事は知っているが訓練は受けていない。銃撃は百発百中。剣載も霧隠シュラより上手い。なのに中二級にいるかというと、隆『めんどくさいし、余り上に行くと目をつけられる』らしい。陽気で明るい。たまに空気を読まない発言をする。

主人公設定（後書き）

随時更新して行きます。
感想、指摘等はどしどし送って下さい。

第二話（前書き）

遅れてすみません。二話目です。

第二話

隆二　ｓｉｄｅ

転生してから初めての土曜日…もとい次の日。俺たちはデパートに来ていた。何でも家の修道院主宰でチャリティー・コンサートをやるらしい。修道院のゴスペルや売れないフォークシンガー等の演奏を聞いて募金してもらうらしい。俺と雪男は受付でパンフレットを並べている。燐は機材搬入等をやっている。

司会「それでは、ご来場の皆様、この南十字デパートにて、チャリティーコンサートをゆっくりお楽しみ下さい」

司会者の声に、拍手と歓声が上がる。俺が受付でチケットを売って、雪男はそのとなりでパンフレットを配る。燐はウサギの着ぐるみを着て募金箱を首から下げながら子供たちに風船を配っている。すき焼き効果が効いているようだ。

雪男は神妙な顔で観客席を見た後、燐に向かって

雪「兄さん、後ろに積んであるパイプ椅子を十個くらい客席の後ろに積んでくれない？」

燐「えー、この格好でかよ…。隆二に頼めば良いじゃん」

雪「でも兄さんは力持ちだし、それに今日の夕飯は…」

燐「！そうだ、すき焼き！ちょっと行ってくるわ」

隆「お前…わかっていたけど人使い荒いよな…」

雪「そんなことないよ。ただ僕はあまり役に立たない兄さんでも役に立つようにしているだけさ」

おおぅ、雪男の腹黒発言。

雪「隆二兄さん、何か失礼なこと考えてない？」

隆「（心を読むな…）そんなことないぞ」

雪「ふーん。そう。だったらいいんだk…！兄さん！」

隆「どうした？雪男」

雪「どうしたって…回りをよく見て！魍魎が集まっている」

隆「ああ、そうか。悪魔か」

雪「兎に角誰が悪魔に憑依されているのか探そう」

隆「はいはい。じゃあ舞台の方から探すか」

そう言って探す。するとすぐに怪しいのが見つかった。

隆「ん？おい雪男。今日はヴィジュアル系のバンドなんて出るのか？」

雪「え？えーと…いや、パンフレットには書いていないけど？ちょっと待って」

そう言って雪男は隣に座っていた小太りのボランティアスタッフに声をかける。

雪「倉橋さん、今日のコンサートに、ヴィジュアル系のバンドは参加していますか？例えば、急遽出られなくなったグループの代役とかで……」

倉橋「ビジュ……？いや、今回、そういった今時のグループは参加していないよ。あくまでも家族向けのチャリティーコンサートだしね。それに、ここのデパート自体がそういうのを嫌がるんじゃないかな。明日とかは、親子向けのヒーローショーをやるみたいだし。ほら、昔やってた『ブルー・ソルジャー』。さっき、楽屋であれの衣装を目にしてね。いやあ……懐かしいなぁ」

なるほど。ところでブルー・ソルジャーってなんだ？

雪「そうですか。ありがとうございます」

隆「雪男。あのリーダーの男だ。間違いない」

雪「まずいな…大混乱を引き起こすかもしれない。――すみません、倉橋さん。ちょっとトイレに行ってくるので受付お願いします」

隆「雪男、俺も行く」

倉「ああ、いいよ。もうお客さんもこないと思うし三人でゆっくり

しておいで」

そう言って俺たちはその場を離れて屋内に通じる出入口に向かう。こういうときは避難経路の確保が第一らしい。本に書いてあった。雪男がガラス戸に触れようとした途端、雪男の爪が割れ、肌が火膨れのようになっていた。これは確か…

雪「結界か――」

そう言いながらブレザーの内ポケットから携帯電話を取り出して騎士團に連絡を入れようとして電波が遮断されていることに気がついたようだ。

雪「くそ……」

隆「（珍しい～。雪男が苛立ちを露にするなんて）」

原作でも何回かしか無かったぜ？

雪・隆「「！？」」

観客からどよめきが起こり俺たちが後ろを振り替えると悪魔に寄生された男がマイクを持って立っていた。

悪魔「怠惰な安寧を享受し、醜く肥え太る愚かな人間どもよ」

観客はそのマイクの低くくぐもった声に反応し、耳を覆う。

悪「今から、貴様らを我らが楽園に連れていってやろう――虚無界（ゲヘナ）にな」

そう言った瞬間、ギタリストとベースが音楽を引き始める。すると観客たちが連鎖反応のようにお互いを殴り始める。

雪「この大人数が一斉に悪魔に寄生されるなんてあり得ない」

隆「（？本当に寄生されたのか？）」

雪「……倉橋さん？」

雪男の声に反応して顔を上げるとそこにはさっきまで一緒に座っていた倉橋さんが立っていた。だが、雰囲気がおかしい。

倉「……」

すると突然倉橋さんが雪男に殴りかかってきた。

雪「ぐっ……！」

雪男はすんでのところで直撃を免れ、鳩尾に肘鉄を入れる。すると倉橋さんの巨体が崩れ落ち、動かなくなる。どうやら寄生されたと言うよりは操られているらしい。

見渡してみると老人や子供が逃げられずに怯えている。そしてそれらに殴りかかろうとした男は……

燐「よくわかんねーけど、無抵抗な老人や子供に殴ろうとしてんじゃねえよ。暴れるんなら相手になってやるぜ」

……男はウサギ――もとい燐に殴り返されていた。

俺と雪男は受付に戻り、バットいれとスポーツバックを取り出す。万が一ね為に得物や薬品等を持って来ていたのだ。だが悪魔を倒すために行動すると燐に見つかってしまう。燐に見つからないように悪魔を迅速に倒さなければいけない。

雪「隆二兄さん、さっき言っていた『ブルー・ソルジャー』使えないかな？」

そうか、その手があった。燐の話だとブルー・ソルジャーは大型の剣を使っていたらしいし、今回は神の道化の出番だな。俺的には六幻のほうが使いやすいのだがそんなことも言ってられない。
俺たちはバックを抱えると気配を消して楽屋に向かった。
楽屋は舞台の袖にあるので時間はあまりかからない。すぐについた。
楽屋内ではデパート側の女性職員が二人抱き合うようにして震えていた。

職員「お、お願い……こっちに…こ、こない…で」

あちゃ～。俺たちのことを暴徒だと思ってるよ。まあ、雪男は険しい顔をしているから仕方ないっちゃ仕方ないか。

雪「落ち着いてください。この暴動は悪魔によるものです。僕は、それを収めるために来ました。正十字騎士團の中二級祓魔師です」

隆「同じく」

職「エ…エクソ…シスト？」

雪「はい」

雪男と俺は免許証と階級証を取り出して掲げた。女性職員が安堵のため息をする。

雪「明日のショーで使う予定の、ブルー・ソルジャーの衣装があると聞きました。何処ですか？」

職「え…？そ、それなら…そこのドレッサーに…？」

職員がまだ震えの収まらぬ手で移動可能な簡易ドレッサーを指す。ブルー・ソルジャーの衣装は俺にぴったりだった。声もボイスチェンジャーがついていて中の人が誰かはわからないようになっていたため問題ない。俺は以前高校の時に色んなバイトをしていたので着方はすぐにわかる。

雪「申し訳ありません。この衣装をお借りします。訳あって身分を隠す必要があるんです」

職「ま、まあ、返していただけるのなら…」

雪「ご心配なく、ちゃんとお返しします。それと明日のショーで使う煙幕等の類いはありませんか？」

職「あ…特殊効果用のスモークならありますけど…」

雪「それを今使うことは出来ますか？」

職「一応操作は出来ますけど壊れていたらアウトだし…」

雪「スモークが出せるようになったらすぐに出してください」

職「は、はい」

雪「それと隆二兄さんはそれ着てくれない？僕が援護するから」

隆「ああ、でも俺が撃っていいって言うまでは撃たないでくれ。何か嫌な予感がする」

雪「わかった」

隆「じゃあ行くぞ」

そう言って俺たちは歩き出す。

舞台にあがると、悪魔に寄生された男が恍惚の表情を浮かべていた。俺は悪魔の斜め後ろに立って声を出す。

隆「［其処までだ！］」

俺の声に反応して悪魔が振り向く。

悪「なんだ…貴様は」

隆「［俺のことはどうでも良い。みんなを早く元に戻せ！］」

悪「いきなり出てきてどこまでも無粋な輩だな」

そして悪魔は俺の剣に目を向ける。一応この剣は魔剣に入るらしい。本には『世界で最も不思議な魔剣』と書いてあった。

悪「なるほど…祓魔師か。ヴァチカンの狗どもめ」

そう言い捨てると悪魔は俺に向かって絶叫した。鼓膜が破れるほどの絶叫の後、まるで音が刃物のように実態を成し、俺に向かってくる。それを神の道化で振り払い悪魔に切りかかろうとした所で悪魔が声を出す。

悪「おいおい。良いのか？この男は心臓が弱いんだぞ？剣で切ったりしたらこの男がその場で死ぬぞ？」

隆「［くっ！］」

まあ、問題はないけど悪魔を油断させるためにもここは引くべきだな。

悪「お前ら祓魔師はこの仔羊を見捨てられない」

隆「［くそっ！］」

悪「どうした？もう終わりか？」

そう言って悪魔は俺に詰め寄ってくる。すると客席から空き缶が投げつけられた。子供が勇気を振り絞って投げたようだ。

子「ブ…ブルー・ソルジャーがんばって…！」

その声に客席の中央でギタリストの男をのしていた燐が反応する。

燐「え？……ブルー・ソルジャー……？」

悪「……鬱陶しい蛆虫どもが！」

そう言って悪魔が客席の方に音の刃を飛ばす。

隆「［ヤバ！］」

俺はその刃を切り落とし、悪魔と向き合う。

悪「ちっ！……まずはお前から殺ってやるぞ…祓魔師がぁ！」

隆「［虚無界にはお前一人で逝きやがれ］」

そう言って俺は悪魔に剣を突き立てる。

悪「く……くそ……この偽善者（エクソシスト）が……ま、まさか……祓魔師が人殺しとはな……」

隆「［この剣は悪魔のみを傷つける。最初からお前の運命は決まっていたんだよ］」

悪「だ…騙しやがったのか…」

隆「［はっ！生憎偽善者なもんでね］」

悪「ク……クソ……が」

忌々しげに動いた悪魔の肉片を神の道化で斬る。黒い粉塵となって

悪魔が宙に消えていく。

悪魔が滅した事によって客席の乱闘騒ぎも鎮静化した。あ、今ごろスモークが出てきた。それに紛れて舞台の袖に姿を隠し、そのまま楽屋に戻る。

楽屋に戻るとき雪男に怒られた。

雪「隆二兄さん。何で僕に発砲させなかったの!?祓魔師はお互いの弱点を補いながら闘うんだよ!」

隆「悪魔に寄生された男は心臓が弱いらしいぞ?悪魔が言っていたからいまいち信憑性に欠けるけど。お前が撃っていたら多分死んでた」

雪「そ、そうなんだ。ごめん、事情も知らないで怒鳴り付けたりして……」

隆「それにヒーローは一人で闘うものだろ?」

雪「隆二兄さん!それが本音!?数行前の僕の台詞返してよ!」

隆「雪男、少しうるさいぞ」

そう言いながら楽屋に入る。そして着替えて燐を探す。

隆「そういえば雪男、燐が何処にいるか分かるか？」

雪「え？…う～ん。さっきは舞台の近くで兄さんのことを見ていたけど…」

隆「じゃあ探すか…って居た。噂をすればなんとやらだな」

少し離れたところに燐が誰かと話していた。

燐「あ、おーい、隆二、雪男。帰るぞ。全くどこ行ってたんだよ」

隆「すまねえ」

雪「ごめん兄さん。早く帰ろうか」

燐「そーいや今日はスキヤキだった！ほら！早く帰るぞ！」

こうして一日が終わった。

第二話（後書き）

感想、指摘等はどしどし送ってください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5154x/

青の祓魔師～転生者というイレギュラー～(改訂中)

2011年12月11日22時59分発行